

「伝える力」が育つ4つの習慣

子どもの「話す力」はゆっくりと育っていきます。子どもに寄り添い、一緒に楽しい時間を過ごす習慣が子どもを伸ばします。内田伸子（筑波大学常勤監事）

家庭でのほたらきかけが、子どもの話す力、思いを言葉にして伝えていく力を伸ばします。言葉を紡ぎだすために必要なことは3つあります。

まずは、子どもにとって話しやすい雰囲気があることです。家族がギスギスしていたり、大人の側に聴こうとする姿勢がなかったりすると子どもから言葉は出てきません。

2つめに、表現するための語彙（言葉）をたくさん与えていくこと。絵本を読むなど、言葉に触れる機会を増やすことで語彙は増えます。

3つめは伝えたい話の中身（コンテンツ）を持たせていくことです。想像力を羽ばたかせたり、楽しい経験をしったりすることで伝えたい思いが募ります。

親子の楽しい時間が子どもを変える

3つのことを心がけつつサポートしていても、子どもと楽しい時間を共有せずして本物の話す力はつきません。

ただイベントに連れ出したりおもちゃを買ったりと、一方的に与えるだけでは不十分なのです。1日のうち短い時間でもいいので、いっしょに料理したり、読み聞かせをしたりする時間を大切にしましょう。そのときあなた自身も楽しめるとよいですね。

言葉の力は人とのやりとりの中で培われます。親と子がともに過ごす時間に会話を重ねることで、子どもの話す力はぐんぐん伸びていくでしょう。

言葉の成長をそぐ家庭の特徴3

思いあたるフシはありませんか？気づいたときが「変わるチャンス」です。

その1 家庭がギクシャク

その2 DVDやテレビを長時間見せる

その3 勝ち負けにこだわる

1 子どもの話を“聴く”習慣

話す力をつけるためには、子どもが言おうとしていることを大人がしっかり“聴く”ことが大切です。

子どもは自分のペースでいっしょうけんめい伝えようとしています。おれこれ口をはさまず、子どもの声に耳を傾けましょう。

話を聴くときに、大人の側に求められるのは“待つ”姿勢です。

話そうとしても言葉にならないときもあるでしょう。そういう場面では「言ってごらん」と話させようとしたり、「それで？」とうながしたりする必要はありません。大人が話を聴こうとする態度を示せば、子どもは自分の力で伝えようとします。話したい気持ちを受け止め、言葉になるのを待ちましょう。

2 五感を使う遊びの習慣

話すためにはイメージする力（想像力）が不可欠です。想像力を育むには、五感と体を使った遊びをするとよいでしょう。五感とは、視・聴・嗅・味・触の5つの感覚のことです。

砂場で遊ぶとき、子どもは砂粒の色を確かめ、土のにおいをかぎ、風の音を聞いています。手の中で崩れる砂に触れて、どんな形がつかれるかと想像力をふくらますことができます。子どもの感覚は鋭く、体に受けるさまざまな刺激から多くのことを学んでいるのです。

ごっこ遊びや、体を使った表現遊びもよいでしょう。想像力を必要とする遊びをたくさんする子どもは、語彙に広がりがあるという研究もあります。

3 親子で読み聞かせを楽しむ習慣

赤ちゃんからと大人まで楽しむことができる絵本。絵本の読み聞かせは、語彙を増やし、想像力を育むことができます。

けれども、わかっておいてほしいのは、「語彙を増やすため」「想像力を伸ばすため」に読むのではないということです。「この言葉の意味は?」「今のはどんなお話だったか言ってごらん」などと子どもを試さないでください。「こんなこともわからないの?」などと評価するのは論外です。

想像力が刺激され、記憶力がよく働くのは子どもが楽しいと感じているときだけです。プレッシャーを与えてしまっては台無し。お話の世界を楽しんで旅しましょう。

4 子どもの考えを引き出す会話の習慣

話す力は人とのふれあいの中で磨かれていきます。家庭では、子どもとの会話を楽しみましょう。

会話はおたがいのやりとり。大人の側は、子どもが自分で考えて答えを出せるよう投げかけるのがポイントです。

例えば、子どもはよく「これなあに?」と質問してきますね。「モンシロチョウよ」とすぐに正解を示すよりも「この前観たチョウと似ているね」「お家の図鑑に載っているかな?」と子ども自身が考える余地を残すと、会話が広がっていきます。

話す力もふくめて、子どもは「ほめて、励まし、広げる」ことで伸びていきます。子どもの世界を広げるのはこうした大人の働きかけなのです。